

本学客員教授・絵本作家

きたむらさとし先生特別授業

創作の時間 5—忘れ得ぬ人々

2024年9月26日（木）



【授業内容】 1000文字以内で忘れ得ぬ人々の面影を彷彿とさせる文章を創作する

【日 時】 2024年9月26日（木曜）4限（14時25分～15時55分）

【場 所】 第2学舎1階 スチューデントコモンズ

【対 象】 本学学生・院生・教職員、一般（10名先着順）

【申込方法】 メール

申込者には、受付確認を兼ねて課題のヒントとなる文章をお送りします。

【受講申込締切】 2024年9月15日（日曜）23時59分

件名に「9月26日きたむら先生授業申し込み」と明記し

本文に「学籍番号/一般、氏名、連絡先」を記載してください。

【課題提出締切】 2024年9月19日（木曜）23時59分

件名に「9月26日きたむら先生授業課題」と明記し、

本文に「学籍番号/一般、氏名、連絡先」を記載してください。

【お問い合わせ・申し込み・課題提出先:】 kobecufs.sp.21@gmail.com（西川健誠）

きたむらさとし先生からのメッセージ —忘れ得ぬ人々—

小学校を卒業して十年近いが、今も時折「ロックじゃねえ」というしゃがれ声を思い出す。ロックミュージックが好きで、エレキギターを抱えて教室に来ることもあった、六年生の時の担任だった先生の声だ。

その先生は、よく怒った。眼鏡もスーツも平凡だったけれど、全力で怒る姿も、怒る基準も、他の先生と違った。宿題を忘れても怒らなかったが、うそをついて言い訳をすると怒った。掃除中に過ぎてガラスを割っても怒らなかったが、それを黙っていると怒った。怒りが頂点に達した合図が「ロックじゃねえ！」だ。

先生の叫んだ「ロック」は、この場合は、音楽ではなく、正直さとか、揺るぎのなさとか、そういう意味だったと思う。昔も今も、私は「ロック」になりたいとは思わない。だけど、自分の信念に反したことをしてしまった時、逆に何も出来なかった時「ロックじゃねえ！」という先生のしゃがれ声が聞こえる。

森川葉の音（もりかわはのん）朝日新聞「声」2024/1/13

これは今年の朝日新聞の投書欄「声」に出ていた二十二歳の大学生が書いた文章です。短いながらも、この先生の姿が目には浮かび、声が聞こえてくるようです。

学校に愛用のエレキギターを持ってくるほどだから、きっと先生は若い頃にバンドをやっていて、プロを目指したこともあったかもしれません。相当入れ込んでほとんど「人生、ロックンロール！」だったのでは。そんな思い入れから「ロック」が彼の価値観の象徴、あるいは標語になったのでしょう。

というわけで、今回の課題ですが、これまでの人生で思い出に残る人のことを書いてみてください。家族であっても友人であっても、誰でもかまいません。また親しい人でなくても、実はよく知らない行きずりの人でも、とにかく記憶のどこかに残っている「人」のことを思い出してみてください。

